



## 昔を 今を 未来を読む

山口 吉宗

学海祭の時季は、読書週間の時期でもある。読書の普及・推進と出版文化の向上を目的として、文化の日を中心に前後2週間(10月27日から11月9日まで)全国的に展開されるこの年中行事には、内容の主なものとして、毎年標語を定め、それを配したポスターの全国の公共図書館、学校、文化団体、書店等への配布がある。第42回の今年の標語は「昔を読む 今を読む 未来を読む」である。読書の意義や効用を説くと取るもよし、読書によって、歴史の示すものを知り、それにより現代社会、現実の事象に在るものを見通し、将来・未来の有り様(よう)を考える、ということを感じるものもある。昔・今・未来一過去・現在・未来一の時間、それに空間、そしてさらに次元を異にする世界にまでもわたって、すべてのもの、あらゆることを伝えてくれるものとして、書物がある。古今東西・森羅万象、あるいは古典からSFま

で、人間の生み出したもののほとんどすべてが書物となって、読まれるべく待ち望んでいる。読書は、人それぞれに、その求めるものを、それら書物から読み取り、そして生かしていくことを可能にさせる。あるいはまた、時空を超えて無限の宇宙に飛翔させてくれる。

今年の読書週間の標語から、読書についての思いは、図書や図書館にかかわること、出版関係のこと、さらには出版メディアの将来、コミュニケーション・メディアの未来のことなどにまでも広がることもある。

読書週間は、戦後まだ荒廃の中にあった昭和22年に始められた。日本出版協会が中心となって、日本図書館協会、日本出版配給株式会社、小売書店の全国連合会など、関係団体が参加し11月17日から23日まで行なわれた。この第1回の標語は「楽しく読んで 明るく生きよ

### 目 次

- ・昔を 今を 未来を読む …… 山口 吉宗…1
- ・1冊の本 希望を失はず  
コリント人への第二の手紙 樽田 修…4
- ・マタイ受難曲を聴いて …… 兎束 淑美…6
- ・旅の雑感 …… 中西 満義…8
- ・講演「いま、何を語り  
つたえるか」を聞いて 日出優紀子…10
- ・大宇宙の中の小宇宙それは 室賀 和子…11
- ・私と本 …… 白川 篤美…12
- ・夕方 街で …… 山崎 範子…13
- ・【図書館ガイド】 ……14
- ・《図書館ニュース》 ……16

う」であった。物資が欠乏し、出版物の入手は思うに任せぬような中にも、平和と自由のよるこびがあり、“新生日本”の熱い思いがあった。物は乏しくとも、心は明るく希望に燃えていて、そのためにも読書を、との呼びかけだった。

青い秋空に映える柿紅葉—その第1回のポスターは、今も鮮やかに私の目に浮かぶ。日本出版協会長野支部（当時、長野市にあった）が、第1回の読書週間の行事として信州出版文化展覧会を長野の城山公園にあった商品陳列館（今の信濃美術館の場所）で開催した。戦争から戻ってその1年前から県立図書館に勤めた私は同館からの出陣を担当したことも思い出される。

第1回の読書週間が好評だったことから、翌23年からは、期日を文化の日（この年7月「国民の祝日に関する法律」が公布施行され、これが最初であった）を中心とする2週間とし、読書週間実行委員会を設けて、現在のように全国的な年中行事として定着するようになった。

読書週間実行委員会は、その後、読書推進運動を、より強化し、いっそう効果をあげることをめざして、昭和34年、発展的に解散して、出版界、出版物流通業界と図書館界の関係団体を中心になって読書推進運動協議会（読進協）を設立した。以来、読書週間も読進協の主宰する行事の一つとして行なわれるようになった。読進協は、読書に関係する団体と出版界とが協調して読書普及の推進、出版物の利用向上、出版文化の発展に努めるため、必要な事業や運動を計画し、その中核となり、各種の事業を行なっている。読書週間には、講演会、展示会、読書グループ表彰など、読書に関連する多彩な催しも各地で行なわれている。

読書週間については、新聞が、それをこの期間中にどのように取り上げるかということに留意して読んでみることも、知り得るところ大であろう。毎日新聞の出版文化賞、読書世論調査などのように、事業として、とりわけ恒常的に行なわれるもののことは別として、まず社説に

ついて—主な新聞は、毎年この期間中に、読書あるいは、それと関連あることについて社説を掲げている。今年の例としてその一部をあげれば、「本を買う側の三つの『なぜ』」（朝日、10月27日）、「利用者に身近な図書館を」（信濃毎日 30日）などというように。これらの社説それぞれを味読すべきは勿論のことであるが、各紙が何を、どのように取り上げ、どのように論じているかを見ることも関心が持たれる。また、これらの社説について、歴年の変遷等に関して考察してみることも意義があろう。コラムについても同様のことが言えよう。読書欄については、各紙の取り上げ方、扱い方を考え合わせながら読むのも得るところがあろう。新聞によっては「別刷り」で読書に関する特集を付けるものもある。今年、朝日が読書週間初日の10月27日に別刷りで付けた「読書特集」の最初のページ全面のイラスト「このごろの本屋さん 境界」は、読書・出版・出版物流通等の現状を、面白く、わかりやすく見せていた。

読書週間の標語は、読書普及とそれに関連することについての主張を、その年どしの社会・文化等の事情も反映させ、凝縮させて簡潔に表現しており、それぞれの時代背景をもうかがわせてくれる。また、モチーフ、レトリック、スタイルの変遷から、表現について学び取らせてもくれよう。第1回から第42回の今年までのものを列記（別表）する。

それぞれの背景を、時には年表や年鑑等をも参照するなどして、読み取ってみることも、わかり得ること大であろう。歴史の流れ、社会の諸問題から、進んで、「未来」にまでも思いをめぐらせてみることや、あるいはまた、読書とかかわりの深い図書や出版関係のことなどについても、そしてそれらと自分の読書や生活とのことなどについても考えてみることは、思索の秋、読書の秋にふさわしく、意義深いことであろう。

なお、読進協は、秋に行う読書週間のほかに

## 読書週間標語

回	年		標語
	昭和	西暦	
1	22	'47	楽しく読んで 明るく生きよう
3	24	'49	おくりものには よい本を
8	29	'54	みんなで本をよみましょう
9	30	'55	読書は人をつくる
10	31	'56	読書がつくるよい家庭
11	32	'57	そろって読書 明るい家庭
12	33	'58	読書でつくろう 明るい社会
13	34	'59	みんなで本をよみましょう
14	35	'60	よい社会 ひとりひとりの読書から
15	36	'61	あかるい生活 たのしい読書
16	37	'62	きょうの読書はあすへの希望
19	40	'65	みんなで読書 明るい家庭
21	42	'67	あかるい家庭 たのしい読書
23	44	'69	いつでも どこでも たのしい読書
24	45	'70	いつでも どこでも たのしい読書
"	"	"	茶の間に雑誌 明るい家庭
25	46	'71	よい社会 ひとりひとりの読書から
26	47	'72	みんなに本を
27	48	'73	レジャーを本で
28	49	'74	本との出会い 豊かな心
29	50	'75	本との出会い ゆたかな時間
31	52	'77	一冊の本から 何かが始まる
32	53	'78	翔べ心 本はその翼である
33	54	'79	燃えよ人生 本との出会い
34	55	'80	素晴らしき人生 本との出会い
35	56	'81	本との出会い ゆたかな人生
36	57	'82	読書はあなたの無限の宇宙
37	58	'83	読書は新しい発見の旅
38	59	'84	秋です 本です 読書です
39	60	'85	キラリ知性 秋の一冊
40	61	'86	読書は永遠のニューメディア
41	62	'87	心に刻もう 確かな一冊
42	63	'88	昔を読む今を読む 未来を読む

○第16回～18回、第19回～第20回、第23回～第24回（2題のうちの1題）、第29回～第30回は、それぞれ同一の標語を用いた。

春には「こどもの読書週間」（こどもの日を中心にして5月1日から14日までの2週間）を開催している。これは昭和34年に日本書籍出版協会が主催し、それが第1回となり、翌年から読進協の主催となり、今日に至っている。子どもの読書の重要性を訴え、一般の関心を高めることを、主要目的として、標語募集、ポスター配布、

優良児童図書目録の刊行、講演会・展示会の開催、読書感想文・感想画のコンクールなどが行なわれている。

5月はまた、「図書館振興の月」とされている。これは、全国の図書館が図書館振興のため行動する月間として昭和46年（「国際図書年」の前年）に、日本図書館協会が、図書館法の公布（昭和25年）された4月30日を、「図書館記念日」とし、これに続く5月の1か月を、この「月間」と定めたものである。以来、毎年この「月間」の標語「図書館をもっと身近に暮らしの中に」を入れたポスターの配布のほか、各種の催しなどが行なわれている。

なおまた、戦前にも「読書週間」という呼称を用いたものがあったが、それは、日本図書館協会が主催して、大正末期から日中戦争時まで全国的に行なった「図書館週間」を、出版界の協力も得て実施したことへの配慮から、府県によっては、「読書週間」と称したものである。

この図書館週間は、日本図書館協会が主催、主催し、出版界が参加して、大正13年（1924）11月1日から1週間実施したのが第1回であった。これは、図書館について認識を広め、利用を促進することを目的として、11月に大体1日から7日までの1週間を期間として、日中戦争開始の翌年、昭和13年まで行われたが、14年に文部省からの戦時下の「一般週間運動廃止」の指令により、日数を短縮し、「読書普及運動」と改称して実施したが、それも太平洋戦争が始まる16年に中止に追い込まれた。

戦後、昭和22年から現在に至っている読書週間は、いわば出版界が中心のもので、戦前の「図書館週間」の継承、復活ではなく、図書館界が主になってのものは、現在では図書館振興の月である。

昔を、今を 未来を読む一昔を思い、今を見てきたが、未来一最も近い未来の次回の読書週間の標語は、どのような内容・形式のものが見られるのであろうか。（教授）

# 1 冊の本 <sup>のぞみ</sup> 希望を失はず



## コリント人への第二の手紙 4:8

樽 田 修

わたしは、講義の終りに、学生にコメントを求めたり、時々、アンケートを行って、共感する問題については、講義の折に少し触れたり、時には、集計結果を学生に配布したりすることもあります。長い間、行政の仕事をして来たものには、アンケートは勉強になり、学生から教えられることが少くありません。中には、「出欠の確認のためのアンケートなら止めて下さい。」などであったりして、学生の多様性を感じます。先日こんな話をしました。どんな人間にも、よい点（長所）と弱点（欠点）がある。ウィークポイントを克服するには、グットポイントを一層伸ばすことが自信にもつながる。その一例として、わたしの様なものにも、グットポイントがある。—それは、「粗食に耐え健康である。」と話をしましたら、爆笑と拍子が起きて、やっと、少し受けたかなと喜んだのですが、アンケートでは、「先生の考えはお古い。いまはグルメの時代、量より質よ。」とありました。

よい時代、よい社会を迎えましたね。でもね、わたしは、「粗食に耐え健康である。」—そのことを無価値だと思ったり、否定した生き方の出来ない古い人間のひとりなのです。



現代を「不確実の時代」と呼ぶ人がいます。しかし、わが国の長い歴史の中に、今日ほど平和な、飢餓と恐怖の少ない時代が、かつてあったのでしょうか、たしかに、今日の激動する社会の中には、明日をも予測し難い不確定な要素も少なからず内在しており、急激に迫る人口の高令化、非行の若年化、校内暴力、登校困難児の急増等頭が痛い社会問題もありますが、一方、今日ほど安心して生活が出来、過剰なまでに物質に恵まれ、経済的にも安心した「よき時代」が果して過去のわが国の歴史の中にあっただでしょうか。

今日の繁栄を迎えるためには、尊い多くの血が流されていることを、わたしたちは、決して忘れてはならないと思います。

長い戦争に敗れた私たち日本人は、だれもが食うに食なく、働くに仕事がなく、住むに家もない—といった国全体が、混迷の極に達して、みんなが、難民の様な暗黒な生活を余儀なくされておりました。今では、「神話」として、信じ難い程のきびしく、痛ましい時代があったのです。

その頃、わたしは、上京して、ある学校に在籍しておりましたが、栄養失調と、不規則な生活がたたって、健康を害し家に帰って暫く静養しておりました。灰色の青春でした。孤独と絶望の毎日で、やがて学籍も抹消され、生きる価値と意味に疑問を感じられる時さえありました。ある日、わたしは、たまたま通りがかりの小さな古ぼけた建物の入口に、「希望を失はず」という粗末な立看板が目にとまりました。わたしは、もし足早に歩いていたら、多分、この小さな看板を見逃したのではないかと思います。

わたしは、少しためらいながらも、その建物の中に入って行きました。「のぞみを失はず」という演題に興味があったのでしょうか。会場には、両手で数えられるくらいの僅かな聴衆で、途中から帰るわけにも行かず聞いておりました。

講師は、まだ聞いたこともない名前で、夫妻ともに米国で教育を受け、三十年間、北京でセツルメントの仕事をして来られたという質素な60才位の中国からの引揚者でした。直感的に並の人ではないと感じたのですが、古い話なので内容はほとんど忘れてしまいました。ただ、今でも忘れることが出来ないのは次の話です。

日本が、戦争に敗れたことを、悔しがったり残念がったりする人たちが少ないが、敗戦は決して不幸なことではなくて、自らを深く反省



するよい機会である。自分（講演者）は、敗れたことを喜んでさえいる。「希望を失はず生きましよう。」—そんな大筋ではなかったかと思えます。わたくしは、この話の一部感銘を受けつつも、一方では、素直に同意し、共鳴し難く、むしろ反発さえ感じておりました。日本がいくら、無条件で降伏をしたといっても、わたしの小さな胸の中には大和魂が生きておりました。戦に敗れたことを喜ぶべきだという極論には、とても納得出来ません。わたしは、小心もので、会場で、反論し、質問する勇気がなかったので、後日、この講師の住所を調べ、生意気にも反論の便りを上げたのです。多分、わたくしは無視されるだろうと思っていたのですが、直ぐに部厚い返信をいただきました。それは、わたくしの疑問や、反論に、実に丁寧に一つ一つ答えてくれており、わたくしの長い便りの倍を超えるものだったと思います。悲しいことに、その内容を十分には理解する知識も、能力もありませんでした。しかし、そこに滲み出ている人間の誠実さ、謙虚さ、愛の深さは、鈍いわたくしの心をゆり動かしました。わたくしは、自分の小ささ、非常識を恥じながら、お礼の便りを上げました。この講演者は、直ぐまた一層丁寧な便りをくれました。ある講演者と、名もない一人の聴衆との交流が進められたある日、わたくしに印刷された一冊の本を送付していただきました。「希望を失はず」です。—それは、神学を専攻した一人の青年、ウィリアム・メレル・ボリスの愛弟子が、日本文化の恩人僧鑑真に感動し、単身、中国に渡り、あたかも敗戦時の日本に劣らぬ程の、食うに食なく、働くに仕事さえない中国のスラム（最下層階級）の子女のため、教育と医療と福祉の向上（セツルメント）に三十年間没頭され、不幸な日中関係の最悪の時代にさえ、「北京の聖者」と仰がれ、魯迅にさえ慕はれた牧師夫妻が、敗戦により、祖国に裸で引揚げて来られ、焼け果てた荒野に素手で、人間教育の原点を目指した愛とロマンの学園を築こうとしている夢を生々と描いたものでした。—そこには、どんな苦難や困難、度重なる試練

にも耐えるものだけが救はれる。「希望を失はず」とも生き抜きましょうとありました。わたくしは、新しい世界、大きな世界があることを知りました。

何時の間にか、わたくしは、講演者夫妻の創設されて間もないバラックの学舎で、先生ご夫妻から、教はる身となりました。ご夫妻は、米国最古の男女共学校、ジョン・フレデリック・オピリンの創設大学のご出身、奥さんの郁子先生は、更にミシガン大学院でM・Aを取得された方です。先生ご夫妻は、翻訳のある原書は使はない方針でした。戦中派のわたくしは、自分の非力に愕然とし、自信を失いながらも、「希望を失はず」と口づさみつつ元気を出しました。わたくしの奥師は神学博士清水安三先生、本年1月17日昇天されるその日まで、97才、世界最長寿の大学学長として、愛と、奉仕と人間教育にその持てる総てを捧げつくされました。

（助教授）



#### 本学の先生の新刊

『おいでなんし — 東信のふるさと  
方言集』

福沢武一著 郷土出版社 1988刊 2,800円

方言考を数多く著している著者が、東信の本学へ着任を機に、この地方を足でくまなく回り、時には卒業生の祖父母からの面接調査協力も受けたりして代表的な方言を収録・考察している。

方言を愛する著者のまきに足で書いた「日本語」解明の労作。

## 「マタイ受難曲」を聴いて



兎 束 淑 美

10月29日(土) 県民文化会館でヨハンセバスティアン・バッハの「マタイ受難曲」を聴いた。演奏はドイツ民主共和国・ドレスデン聖十字架合唱団とドレスデンフィルハーモニー管弦楽団であった。

「マタイ受難曲」と言うのは、聖書マタイによる福音書からイエス・キリストの受難に関する章句が曲となっているものである。テノールが担当する福音史家によって歌い語られる。大きく二部に分けられているがバッハの時代はその間に説教が行なわれたという。

物語にそって沢山の曲の中から主なものを挙げて見ると、イエスがゴルゴダの刑場まで十字架を負って「受難の道」を歩いて行く所から始まり、ユダの裏切り、過越の晩餐(最後の晩餐)ゲッセマネの苦闘、捕縛、訊問と磔刑判決、鞭打ち、十字架上のイエス・イエスの死、十字架よりの降下と埋葬、哀悼と告別、終結合唱から出来ている。

この曲は1927年バッハ42歳の時の作で、当時ライブツヒ(現在東ドイツ)の聖トマス教会の合唱長兼音楽監督をし、非常に充実していた時と言われる。毎週一曲の割合で教会の礼拝の曲を作曲していた時である。

その中でも「マタイ受難曲」はバッハが渾身の力を持って作曲したと言われる大曲で、全78曲、演奏時間も3時間以上の曲である。当日も6時開演し9時半終演(15分休憩)であった。

この曲は何回か聴くが、きちんと聴く事の少ない曲である。実際は長過ぎて内容がわからないと厭きてしまう。特にテレビでこの曲を見ようと思っても、なかなか最後迄テレビの前にはられない私である。

ドレスデンは、多くの音楽家と関係のある所である。バイリッヒ・シュッツやシューマン・ブラームス等が浮ぶ、東ドイツの中でも行って

みたい都市のひとつである。

さて、オーケストラの後に並んだドレスデン聖十字架合唱団は、小学校中学年から高校生までプログラムを数えると105名である。

汚れないボーイソプラノの斉唱で讃美歌が始まる。福音史家の他、イエス・ユダ・ピラト等の登場人物が出て来て歌う。清澄な少年合唱団の響きが、何と美しいだろう。会場の暗い席でプログラムに書かれている歌詞を追いつら合唱を聴いたが、聖書の場面とメロディーとのニュアンスがわかって一言一言胸に響いた。3時間上の曲で、途中一回休憩があったが、ソリストも合唱団もずっと舞台の上で78曲に亘る曲を順番に歌う。ソプラノ・アルト・テノール・バリトン・バス・合唱どれを聴いてもキリスト教の長い歴史の重さと、それと共にある音楽の深さを感じ、音楽が自然に心の中に沁みて来て、心の奥で深い感動となった。長い時間なので小さい団員は眠くなってしまわないかと思ったが、合唱団の少年は音楽の中において、大変お行儀が良かった。この様に内容の深い曲や、楽しい曲、美しい曲、聖書の聖句等が合唱団の少年の血となり肉となって人格が形成されて行くことを感じる。声も美しいが何て素適な表情なんだろう。天使の表情だと思った。

帰宅後、感激を胸にプログラムを隅から隅まで読んだ。この合唱団は別名クロイツ教会の聖歌隊、クロイツ・コールと呼ばれていて創立は古く1206年で世界的な聖歌隊の中でも最も古い782年の伝統を持っている。又ドレスデン管弦楽団も百年以上の歴史がある。

1206年という年について調べて見ると日本史では鎌倉時代、建永一年に当り源実朝の時代に

入っている。この三年前には頼家が伊豆の修禅寺で暗殺されている。世界史を見ると蒙古ジンギス汗即位の年である。

ルターやメランヒトンなど偉大な宗教改革者たちに生まれ、バロックの巨匠ハインリッヒ・シュッツを始めドレスデン歌劇場の数多き楽長たちが、たえず合唱団に心血を注ぎ、大バッハも、モーツァルトも、ゲーテもこの合唱団に讃辞を惜しまなかったと言う。30年戦争、ナポレオン戦争、第一次世界大戦、又近くは第二次世界大戦でドレスデンは爆撃によって壊滅的な破壊を受けた悲劇の都市であり、そこで生き抜いて来た合唱団である。一時は復興不能と言われたが、その不能を一步一步可能に転じて行ったザクセン人の苦痛に満ちた窮乏の生活の傍らにあって、名指揮者マウェルスベルガーとクロイツ・コーアは淡々と心の音を歌い上げ人々の精神に火を灯しつづけた。合唱団にとっての苦難は空襲による大破壊だけでなく、教会の立場を脅かす社会主義体制に国が転じたこともあった。以前のようにあらゆる階層の人ではないがクロイツ教会に赴き聖歌隊を聞くと、そこに集まった市民の姿があまりに真摯であり、聖歌隊の歌う聖句を共感しながら信仰への証を確かめ合っている姿を見ることが出来、それは大変感動的なものであり、こうした聴衆こそ現地に行かないとわからないと菅野浩和氏は書いている。又聴衆についても次の様に書いている。日本と異うのは娯楽的コンサートと教会内コンサートを区別している点である。日本の場合はどちらでも拍手があるが、日本では演奏会場を教会にするからであるが、ここでは教会の場合は礼拝なので演奏が終っても拍手はなく余韻と感銘は一人一人の心の中に深くきざまれ教会を立去って行くと言う。

又この合唱団からはペーター・シュライヤーや、テオ・アダム等、優れたソリストを輩出し、今回もペーター・シュライヤーは福音史家で合唱団と歌う。又指揮者マルティン・フレミッヒのお孫さんも今回少年合唱団で歌っていると記されている。

マルティン・フレミヒ教授が「マタイ受難曲」について述べている中から一部を抜萃して見る。バッハはルターから受継いだ「十字架の神学」の視点に立ってキリストの福音を単に言葉や観念による知的手段だけでなく、聴者に全人格的に訴えかつ音楽表現を持って釈義し提示している。注意して欲しいのは、単にいわれのない無実の罪を被せられて無残な死を遂げたイエスと言う一人の傑出した人物の受難を描き、その死を悼む趣旨の音楽でない。我々神から離れて罪と滅びの世界に生きざるを得ない哀しい人間のありさま、つまり私達をそのまま救い取って新しい生命の世界へ、神の義の支配する復活の希望と喜びへと導いてくれる。人間の宗教心や、信仰、無信仰のいかに係りなく、神からの喜ばしい訪れとして、宣べかつ歌うところの福音の音楽である。

この曲はバッハの初演から百年後にメンデルスゾーンによってバッハの死後初めて演奏されたのである。当時バッハは忘れられていたのである。そしてこの演奏によってバッハの音楽は復活したのは有名な話である。

合唱団の歴史を見ても、「マタイ受難曲」にしても大変長い歴史と重さを感じる。

それに比べ私達の存在は小さいものであるが、昨年は11月末にベートーベンの「第九」を歌った。今年は「マタイ受難曲」を聞くことが出来た。日本に居ながらにしてこんな音楽を聞かれる幸せを感じると共に、今回合唱団の歴史やそれに係ることから平和の有難さをも感じる事が出来た。

フレミヒ教授や、可愛い少年合唱団、ソリスト・オーケストラのメンバーに、美しい音楽を聴かせて頂いてありがとうございます、心から御礼を言いたいと思った。

( 助教授 )



## 旅の雑感



中西満義

私は、高校、大学時代とよく一人で旅に出かけた。ここに書こうとするものは、そのうちの一つについてである。図書館の機関誌に旅の思い出を書くことは少しためらわれたが、読書と旅というものには共通項が少なからずあると思われるので、お許しを願いたい。

私は時として、読書から得られる以上のものを旅の中より見出すのである。読書も、旅も、その行為を能動的に起きなければ、何も得られない。そして、ともに実行に移すや、それまでに知らなかったことを発見させてくれる。「旅に出ることは日常の生活環境を脱けることであり、平生の習慣的な関係から逃れることである。旅の嬉しさはかように解放されることの嬉しさである。ことさら解放を求めてする旅でなくても、旅においては誰も何等か解放された気持ちになるものである。」と三木清の言うように、旅は日常の生活から個人を解放させてもくれるが、読書もまた同様であろう。

大学四年の秋、ちょうど大学祭が行われていた頃であるから11月の上旬だったと思うが、私は関西方面への旅に出かけた。私の学生時代の旅のほとんどがそうであったように、それもいたってつましやかな費用をおさえたものだった。しかし、そのおかげで、私は旅のプロセスを楽しむということを体験できたし、また多くの人々とも知り合うことができた。

列車は、新幹線などといった野蛮なものを使わず、東京駅を深夜に発つ大垣行の普通列車。この列車はまことに奇妙な列車で、私の場合、これに乗り込むと旅に出るのだということを実感するのであった。車内は、殊に週末は、大変に混み合う。「こんな時間に、どうして」と初めて乗った時は思ったのだが、混み合う理由はむしろその時間にあった。東海道線下りの最終

に近いこの列車には、勤め帰りに同僚と一献かたむけた(?) サラリーマン諸氏が、午前さまになってもなんとか我が家へ、という思いで乗り込んでくるのである。車内の彼らは、一日の終わりを惜しむかのように新たな酒宴をくりひろげる者、疲れ果てて立ちながら寝ている者など実にさまざまな姿を見せてくれる。ともかく、そんな湘南通勤連と、それぞれの目的地に思いを寄せる旅人連とが乗り合わせた列車は、小田原を過ぎるまでは都会の雑踏をそのままに詰め込んで進むのである。

大垣より先に行く者は、そこで西明石行に乗り換える。車内は様子を一変し、早朝の通勤通学者が加わってくる。一夜を車内ですごした者は、疲れを見せずにすがすがしい朝の活力に溶け込まなければならないのである。そして面白いことに、ここまで来ると耳に飛び込んでくる言葉も変化する。女子学生たちの言葉のイントネーションは私が旅にあることを教えてくれるのである。このように列車を乗り継いで目的地の京都に着くのは翌朝の九時過ぎである。あちらこちらを目指す前に、駅近くの喫茶店でモーニング。私の旅はおよそこんな風にして始まるのである。

さて、余談が長くなってしまったが、その旅の主な目的は、卒業論文のテーマに選んだ西行に関する地跡を尋ね歩くことにあった。西行というと、平安時代末期の歌人で、二十三歳で出家して以後五十年に及ぶ年月を僧として、また歌人として送った人物である。西行は京や高野山を中心に生活していたが、その足跡は伊勢などにも認められ、四国へも一度、また東北地方には二度も赴いたようで、関係する地跡は全国に及んでいる。当時の都人とすればこの行動範囲の広さは相当なもので、“漂泊の歌人西行”



といったイメージが出来あがったのも肯けるところである。

その折に私が訪れたのは“花の寺”として知られている勝持寺や仁和寺、東山界限、そして西行終焉の地である河内の弘川寺などであった。中には史実に欠ける伝承的な地跡もあったが、行く先々で私は八百年も昔に生きていた西行に思いを馳せることができた。私のとりとめもない質問に懇切な応対を示してくれた弘川寺の住職のことなど思い出は尽きない。

京都や大阪を訪れることで西行という古人と対話するといった私の所期の目的は達成されたのだが、その旅を更に印象深いものとしたのは帰りきわに何気なく立ち寄った場所であった。いや、場所と言うよりはそこで出会った人であった。

京都・大阪をあとに東京へ向かうべく列車に乗った私は、それを静岡県掛川で下り、佐夜の中山へと足を運んだ。何を見にというわけではなかったが、そこは西行が再度の陸奥旅の折に、「年たけてまた越ゆべしと思ひきや命なりけり 佐夜の中山」という絶唱を詠出した所であったので、少しは気にかかっていたのであろう。

掛川駅から、人に聞いて、大井川鉄道バスで日坂まで向かった。そこからは急な登り坂を両脇に茶島をながめながら峠へ。やがて平坦な道になり視界がせばまったかと思うと、一転して景色がひらける。そこで私の目に飛び込んできたものは、「年たけて」と一字一字しっかりと刻まれたどっしりとした歌碑であった。「なんだ、これは〆」、全く予想もしていなかっただけにその衝撃も大きかった。

しばらく私はその周りを徘徊し、上り坂の疲れを思い返したりしていた。そしてその場を立ち去ろうとしたとき、歌碑のちょうど向かい側にある一軒の茶屋に目がとまった。扇屋というその店は東海道を徒歩で往来していた昔を偲ばす趣があった。そして私は、古い店先に腰を下ろしている女将をみとめた。女将の方でも先から歌碑のあたりをうろついていた私が気になっ

ていたのだろう。近寄ってひとときの休息を求めた私を、鈴木春恵という女主人は快く迎えてくれた。

そのときの有様を私の走り書きは次のように記している。

峠に西行法師が年たけて…の歌碑あり

又、扇屋なる格式ある鮎屋あり

女将、齢七十なるが、いまでも健勝なり

我、西行が跡を尋ねて至りしことを告ぐ

老将、いたく感激す

西行法師を我が国第一の詩人なりと云ふ

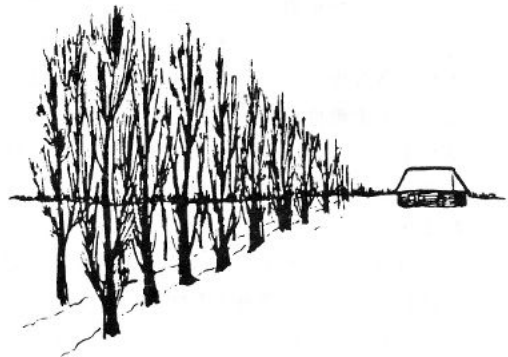
我、佐夜の中山にさはど心寄せざりしを、

老将に会ひて心満たさるるを覚ゆ

更に記すこと多数あれど、甲斐なし

西行が縁で知り合った私と春恵さんの会話は、それから数時間に及んだ。あつかましくも、一夜の宿りと、夕餉をいただいた私は、更に朝餉を馳走になって峠を今度は金谷へと下った。その春恵さんに最後にお会いしたのは、病床と呼ぶにはあまりにもいたいたしい老人病棟の一室においてであった。「命なりけり」の一句は、春恵さんとの出会いによって、限りない力をもって私を捉え続けている。

(講師)



## 講演「いま、何を語りつたえるか」を聞いて

幼児教育科 1年 日 出 優 紀 子

私は幼かったころ「ちいさいモモちゃん」が大好きでした。小学校の高学年のときには、松谷先生の「私のアンネ・フランク」を読んで非常に感動しました。この本には読む度に強く心を打たれ、また涙なしには読むことができなかったのを覚えています。

とても恥ずかしいことに私は、今回の講演を聞くまで、松谷みよ子先生について何も知るところがありませんでした。しかし、小さいころから松谷先生の作品に親しんでいたんだなと思うと、なんだか先生の話を聞きながら親近感が湧いてきました。穏やかな表情、やさしい口調は、なるほど児童文学者だなと感じさせられました。

私は今でも童話や絵本が好きで、物語が字で書かれていない、つまり絵しか描かれていない絵本や、外国の童話—すべて英語

でストーリーが書かれている—など気が向くと、見たり読んだりしています。そして、それらの本が好きなの理由というのは、絵本や童話は素直でとても柔軟性を持っているからです。まるで幼な子のようなと思うからです。だから、見たり読んだりする度に、新鮮でありほっとさせられます。

最近、松谷先生の本は読んでいませんでしたが、この講演をお聞きしながら、今すぐにも読みたいという気になりました。

松谷先生が、空襲の中で童話を書きはじめた

ということを知り驚きました。それも、今の私と同じかちょっと若いぐらいの年代のときに。戦争という、戦争を知らない私には想像し難い環境の中で、童話を書いたということは、とても豊かな心を持ち合わせていたのだろうと思います。また、先生は童話を書くことによって希望を抱いていたのかもしれませんが。

今日も絶えることのない国と国との争い。豊かな自然を破壊し、人体をもむしばむ公害。戦争を知らない世代が増え、公害問題に目をそむけたり耳を傾けようとしない人間がいる中で、童話はそういうところまでも強く突こうとして



いることが分かりました。また、日本人は第二次世界大戦において、被害者であると同時に加害者でもあることを忘れてはならないのだと思いました。そして、それは残酷極まりなく、できる

ことなら全てを覆い隠してしまいたいようなことですが、後世に語りつたえていかなければならない重要な事実であることが分かりました。

私は今は女子短大生ですが、数年後、人の子の母となる可能性は少なからずあるわけで、そんなことを考えると、とても良いお話を聞くことができ喜んでます。モモちゃんとの出会いからは、10数年という年月が経ちましたが、今一度松谷先生の童話を読もうと思います。きっと私の中で、形あるものとして読み深めることができると期待しています。

## 大宇宙の中の小宇宙、それは・・・・

国文科 1年 室 賀 和 子

秋桜に大宇宙みる小宇宙

“信州に却回して塩田に館す。乃ち信州の学海なり”とは普門の言である。遠い昔、多くの学僧がこの地を訪れ、勉学に励んだという。

去年の秋、私はこの塩田平に点在している古塔を巡り、古の人々の美意識や技術等に直接触れ、その文化に、強く心打たれました。その折に、ある寺の参道脇で目にした一群のコスモスの花。爽やかな秋風に揺れる、その清楚でしかも健康的な美しさに、更に感動したのでした。

そして今秋、今度は夜の塔を見る機会を得、早速出掛けました。所は本学の南方に聳える独鈷山の麓、前山寺。その寺の山門脇にある美術館の館主主催の演奏会「塔をつまびく」がそれです。夜露に濡れた塔への石段と大銀杏を前景に、ライトに照らし出され、巍然としてそそり立つ美しい三重の塔。それを背景に、津軽三味線の哀しくも力強い音色。小気味良く、又時におどけた調子で打ち鳴る和太鼓。横笛や尺八のあの凜とした響き等が、ひんやりとした夜の空気を突き抜けました。日本の音楽に流れる一種の寂寥感が、私の胸をくすぐり、何時しか感傷の世界へ迷い込んでしまう。又、その調べに呼応するかのようなコオロギの鳴き声が、今度は安らぎを与えてくれる。灯りといえば、三人の演奏者への簡素な二、三の電灯と塔を照らすサーチライトで、あとは僅かな星々が微かに輝くばかりです。小さな演奏会に集まった幾人かの人びととコオロギ達、囲りの木々。この一つの小宇宙が抱くさまじまな思いが入り交り、そこから発散した輝きを、黒々と澄んだ闇はきれいに吸い取り、永遠の彼方へと一途に運び去る。そして何億年後か、とに角、途方もない時間を費し届いたその輝きを、地球の光として何処かの星の誰かが眺めるのです。過去へ現在へ未来へと繋がる永遠の時間を感じ、再び今、本堂の滯

れ縁に腰掛けている自分を見出した時の驚きや感慨は、到底言い尽くせないものです。しかもこの地球は、自ら回転しながら、かつ物凄い速さでつつ走っていて、決して静止する事が無いという。にも拘わらず、この静寂はどうしてもたらされるのだろうか。改めて宇宙の広さに気付く、唯湛然とするばかりである。この永遠に止らない時の流れの中で、自分をしっかりと捉える事は非常に難しい。自分の存在、或いは美を感じる心は、本来あいまい模糊とした中にあるものだと思う。人はその判然としないものを明確にしたい欲求に駆られる。それを満たす為に人間は、時には喜怒哀楽を思い切り表わすべきではないだろうか。喜びの後の満足感と不安感、怒りを露わにした後の空しさや寂しさ、悲しみの後の安らぎは、きっと人の心を豊かにしてくれるのだろう。そして、その豊かな心の所産が、いわゆる、芸術と呼ばれるものであると思うのです。

一冊の本、一枚の絵、一つの曲に出会い、そこに自分の存在を意識できた時、人は誰でも小さなコスモスの花の中にも入る事ができ、又、宇宙の彼方へも飛んで行ける、と思う。

この、完全に自由な心を得るには、更に“求める心”が必要である。その心に応えてくれるものの一つに、図書館が挙げられる。書架の間をゆっくり歩いていると、今の自分の周波数に、敏感に反応する図書が必ずあるはずだ。図書の方でも私達に素早く対処すべく、虎視眈眈として待ち構えているに違いない。その本たちの声無き叫びをキャッチできたならば、もうそこには自分だけの“大宇宙の中の小宇宙”が、果てしなく広がっていくのです。



## 私 と 本



幼児教育科 2年 白川 篤美

小さい頃、寝る前に母によく本を読んでもらいました。それが私と本との出会いでした。その頃は、サンタクロースの存在を信じていたり、魔法使いになれるらしいのにと夢を膨ませていたものです。

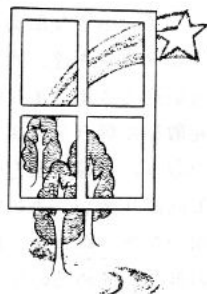
小学校の頃は、父が読書家という影響もあり自然と読んでもらう側から自分で読むというようになりました。本を読んでいると知らず知らずその物語の中に入ってしまうような感覚が楽しくていろんな本を読みました。小学校時代が一番本を読んだ時でもありました。大好きな本は、たくさんあってあげていけばきりがありませんが、その中でもシートン動物記と世界の童話全集は、何度も何度も読んだ本でした。たくさん読んでいるうちに、自分でも、童話を書きたいという欲求が出てきて、小人やサンタクロースなどのお話しを書いた事もありました。書けば書く程、想像がどんどん広がっていった覚えがあります。書いたものに表紙や絵や後書きを添えたりして本の真似事をしました。文章は下手でも自分なりに満足する事ができました。よく妹と真似事の本を交換し、評価しあったものです。そんな事を続けているうちに今度は、劇を作ってみたくて台本を作り兄弟三人でやった事がありました。発表の場は親の前でした。いつも頑張ってくれるから感謝の意味を込めたのものでした。劇などが終わった後、拍手をしてくれてとても嬉しくて作って良かったなと思った事を覚えています。まさか本を読んだ事がきっかけで、こんなに展開していくなどとは予想もしなかったもので、自分でも驚いた程でした。今では、それもいい思い出だと思っています。

中学頃になると楽しむ事も勿論ですが、本を読み考える様にもなりました。椋鳩十氏や浜田広介氏や芥川龍之介氏や畑正憲氏や小川未明氏

などが書かれた本を好んで読みました。私がおもい主人公ならこういう行動をとっただろうなどと思ったり、他の人の気持ちになって考えたり、ここの表現がいいと思いつつ読みました。この頃感動した本は『ビルマの堅琴』などでした。

高校の頃は、源氏物語や関ヶ原の戦いの本など昔のものにも興味を持ちました。かと言ってそればかりでなく赤川次郎氏などの推理的な一般的に軽読書と呼ばれているものも読んだり、『ロックよ静かに流れよ』などという松本で実際にあった話なども読んだりしました。本は書いた人の心や時代が背景にあるんだなとつくづく感じた時が高校の時でもありました。また小さい時に読んだ本を読み返すと、あの時こう思ったのに今はこう思うなどという考えが出てきたのもこの頃でした。

そして短大に来て幼児教育科という事もあり、絵本と接する事が多いので昔を懐いています。私は今まで本と出会い自分もだんだん成長してきたのではないかと感じています。これから多くの本と出会い感動したり、発見をしたりして自分をどんどん大きくしていけたらと思っています。





## 夕方 街で 一 家族について考える 一



国文科 2年 山崎 範子

高齢化がますます進んでいる現代、経済は豊かになったものの、真の幸福を感じて生活している老人はいったい何人いるだろう？

いきなりこんな事を書いたのは、一人の見知らぬ老人とのちょっとした出会いの中で考えさせられたことがあったからである。

それは、11月のある寒い日の夕方、ものすごい勢いで、老人が前にのめりながら坂を下って来た。私は驚いて端によけた。すると、すれちがいざまに足がもつれ、すべり込みのような恰好で、その場に転倒してしまった。私は、すぐさまかけより、「大丈夫ですか」と助け起こそうとしたが、相当ひざを強く打ってしまったらしくなかなか立つことができなかった。やっとのことで助け起こしたものの、老人のズボンには大きな穴があいてしまい、私の肩にしがみつこうよにつかまり、体はガタガタ震え、しばらくは、口もきけない状態だった。ようやく「上田で降りるはずが、間違えて小諸で降りてしまったので困っている」と言った。この寒空に薄い背広一枚の軽装である。そして、ポツリポツリと、鼻水を袖口でぬぐいながら老人は話しはじめた。昨年妻を亡くし、東京で独り暮らしをしている。今日は上田に住んでいる息子夫婦に呼ばれて、遺産の相続についての裁判をするために来たのだ。と、老人の体は、とても軽く感じた。駅に着くと、老人はカバンを開け、「金ならいくらでもある」と言って財布を取り出して私に見せた。中には一万円札が束になって入っていた。私はいきなり大金を見せられて、焦ってしまい、「早くカバンにしまってください」と言うのが精一杯だった。そして老人は特急に乗り込んだ。駅のホームで電車を見送りながら、私は涙が止まらなかった。拭いても拭いても止まらなかった。おそらく、この老人にとって一万円札の束は何の価値もないのだ。本当に求め

ているのは、「背広だけじゃ寒いから、何か上に着ていった方がいいよ」と言ってくれる家族なのかもしれない。

今、24時間風呂が話題になっている。お金はあるけれど、家族から孤立してしまった老人達が、人のぬくもりと対話を求めてやってくるのだという。これは、核家族化が進み、老年層と若年層の境界線が引かれてしまうことから生じた現象だといえるのではないかと思う。テレビの報道番組や新聞のコラムなどで、こうした老人問題をさかんに取り上げ、「老人の孤立化」に歯止めをかけようとしている様子がおかがえるが、現状は、24時間風呂などの、老人をターゲットとしての施設は増える一方である。私のまわりでも、肉親と同居せずに一人暮らしをしている老人がいる。これは、とてもさみしいことだと思う。もっとも、私自身がこの問題を客観視してられるから言えることなのかもしれないが。しかし、戦後の日本を支え、子供達のために必死で働いてきたであろう、あの老人の事を思うと……………考えさせられてしまう。



## 【図書館ガイド】

## 私の図書館奮闘記

## — 私立短大図書館担当者研修会（広島）報告を交えて —

司書 甲 田 ゆかり

月日のたつのは早いもの。社会人として5年、司書として3年が過ぎる。振り返れば数々の思い出が、胸を去来する。図書館との出会いとなった一年目、先輩より手取り足取りの指導を受ける。蔵書点検の後、背筋をピンと伸ばしすまして並んでいる本達にこれから先への不安ばかりを感じたあの日。2年目、6月の下旬から約2か月間、大正大学夏期司書講習会に参加。図書館とはナンゾヤからはじまった一日8時間の講義。毎日毎日が己と図書館との戦いで日が暮れて行く。はじめての東京生活に、戸惑いを感じている間もなく、二百余名の仲間と共に、同じ目標に向かい前進あるのみだった日々。たくさんの本の中にうもれながら、息つくひまもない程の演習又演習。帰路の池袋、雑踏にのまれながらつぶやくのは、「0は総記、1は哲学、2は歴史・地理、3は…」とNDC（日本十進分類法）これではまるで『歩く049（雑著）』

今、思い起せば夢のような日々。私にとっては何にもかえがたい貴重な体験。9月初旬様々な先生方との出会いの中からえた、両手一杯の贈り物を胸に帰校した私を、我が図書館は又新鮮な感触で迎えてくれた。その日から私は、一応司書としての第一歩を踏み出しはじめたのである。

それから半年後、それまで目録カードを打ち出すことで文書作成機としての役割を果たしてきたワープロへ新しいソフトが導入されることに決定した。データシートを打ち込むだけでカードは勿論、新着図書、原簿まで打ち出されることになったのである。その日から正にワープロと私との熱い(?) 駆け引きがはじまった。そもそも、コンピュータ恐怖症の私にとって知らない単語やわけのわからないキーが多すぎる。

ワープロを前にただため息。マニュアルを理解しなければ、キーボードを覚えなければと気持ちばかりがあせる。あせればあせるほど画面にはエラー表示ばかり。たった一行のことばでディスプレイから私に指示を送る機械との対話は、なんとも味けない。ジレンマに陥り、ワープロをコンピューター並に動かすことができるだろうかと頭をかかえてしまった私。が、社会人たるもの失敗は許されないという、追いつめられた気持ち、なるようになるさ! という0型特有の開き直りが、今日までのワープロと私のおつき合いを、支えてくれたような気がする。

なにはともあれ、今日も私はワープロとの対話を続ける。

今年7月広島で行なわれた、私立短大図書館担当者研修会に出席する機会があった。情報の洪水といわれる昨今、どの業界においてもコンピュータの進出は目覚しく、図書館界でも例外なくその波は押し寄せている。今回は「情報の多様化と司書」—これからの図書館を考える—をテーマに、様々な角度から話し合いがもたれた。ここでは、事例として発表されたH短大の「利用者教育」（文献検索ガイダンス）と分科会（図書館の機械化）について述べてみたいと思う。

短大利用者の特徴として

1. 授業終了と同時に、集団で詰めかける事が多い。（特に課題を出された場合）
  2. クラス単位で授業が組まれるため、大勢が同じ質問をしてることが多い。
  3. 即結論を要求する傾向がある。
- 等が上げられる。H短大ではこれら利用者に対する文献検索ガイダンスの必要性を感じ、「図書館利用法」「基本的な資料検索」「専門的な

資料検索」の3回のガイダンスを行なっている。本学図書館においても入学時に「利用法について」のガイダンスは行なっているが、その他については検討課題であるので、その方法や成果について大変興味をもった。文献検索は、ある程度の知識をもって望まないと、大変困難な事に感じ、投げ出しかねない。私も司書講習に参加した際、情報検索のための tool (道具) について学んだが、より早い「答え」を見つけたための文献資料等を知ることができ、事柄をいち早く調べ出す楽しさを感じると同時に、現在仕事をやる上で役に立っている一つでもある。H短大では、文献検索の学生配布用の資料を作成し、学習させ、又教員と図書館との関係を密なものとし、レポート等の課題を事前に把握してそれに備える等、学習者のサービスに徹するよう努力しているとの報告もされた。本学図書館においても、文献検索の重要性を今一度認識し教員との連携体制を整えていければと思った。

何回かこの研修会に出席するたびに、「図書館の機械化」の分科会に参加するが、年を追うごとに導入校が増え、それに伴い問題点も多く出され、関心度が高まっている。今回は導入する前にもう一度「なぜ、今コンピュータなのか」ということを考えてみる必要性の大切さを問う発言から討議が進められた。話し合いの中で図書館の機械化を考えたらず、理想とするデータの内容を決め、現在行なっている仕事の内容手順を再検討すること。データ形式をベースにハードウェアの制約・ソフトウェアの制約等を考慮し、コンピュータ導入を具体化すること。

また、システムを最終決定するには、業務や帳簿についての資料をメーカーに提示し、ハードソフト共メーカー側の案を提出させ、検討するという形となるが、自館の目的を実現するシステムであるかどうか判断するのは、館員の役割である等の意見が聞かれた。これらのことからわかるように、これからの図書館員にコンピュータの知識は不可欠になると考えられる。来春巣立ちゆく本学第一期の司書となられる卒業生も、現在の図書館事情をわきまえ、新しい時代の司書としての成果を上げられるよう期待したい。

○ ○

あれから、5年。手書きからワープロへ、そして今、コンピュータへ、時代は確実に流れている。その中で私自身、司書としてどれだけ成長したのだろう。ただ「時の流れに身を任せ」ここまで歩いてきてしまったのかもしれない。これから本学図書館も着実にコンピュータへの道を歩みはじめるだろう。その流れにさからわず、私も共に成長したいと願うと同時に、たとえコンピュータ対人間の対話が多くなろうとも、私は人間対人間の対話を大切にできる司書になりたいと思う今日この頃である。

————— ★ ————— ★ —————

本号の図書ガイドは、利用についての案内・説明等を少しお休みして、甲田司書に登場してもらいました。現場を預る私達二人がコンピュータ化への準備を万端整えて、ハードの到着する日を指折り数えている日々です。 (N)

#### ——— 本学の先生の新聞 ———

『異端・放浪・天逝の画家たち』

三田英彬著・蒼洋社(発売 桜楓社)1988刊 2,800円

私達の心を打つ不朽の名作を遺した8人の絵描き(青木繁等)達の型通りでない鮮烈な人間ドラマを明治・大正・昭和初期の画壇を舞台に親しみ深い筆致で語った画家刊伝。

#### ——— 本学の先生の新聞 ———

『幼児のための創作オペレッタの作り方』

北村恵子著 樹雲書房 1988刊 1,500円

本学での創作オペレッタの研究と実践の積み重ねから、「創作オペレッタとはなにか」から始まり、テーマの選び方、脚本・作曲・舞台構成などを詳しく、又、園の実情もまじえて、保育現場の創造へのいざないの書。

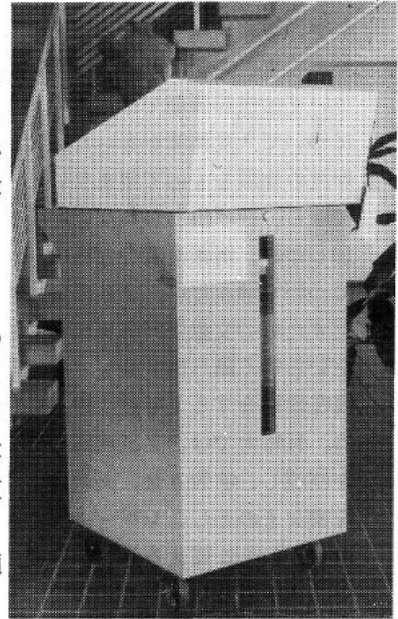
## 《 図書館 ニュース 》

現在の図書館が独立の建物となって以来、毎夏、かなりの暑さに悩まされていたのが、ようやくクーラーが設置され、快適な閲覧室となりました。折しも今夏は冷夏だったため、稼動日数はあまりなかったものの、クーラー設備の図書館をもっている短大は県内でも唯一本学だけです。環境にめぐまれた図書館、もっと利用しましょう。

### — 図書返却ポストについて —

図書館閉館後まで、講義を受けている皆さんから、「授業が終わってからでは、本が返却できない」という声が聞かれました。そこで図書館では、11月より「図書返却ポスト」を設置しました。ポストの上にカードを用意しておきますので、学生番号と氏名を書き本に挟んで、投入口から入れて下さい。但し、カセット、CD、紙芝居等は傷み易いので必ず閉館中にカウンターへ返却して下さい。

尚、このポストは図書館閉館後のみの使用とします。ゴミ、缶類は絶対に入れないで下さい。



### ~~~~~ 寄贈 図書 紹介 ~~~~~

本学の北野理事長から、「時代の流れをどう読みとるか」（講談社）「岩田専太郎さしえ画集」（毎日新聞社）等約150冊の本を、寄贈いただきました。（内容については新着図書100に紹介済）

尚、自由文庫にも多くの図書を寄贈していただきました。現在、整理中です。

理事長の御好意に感謝し、大いに利用しましょう。

## 編 集 後 記

ソウルオリンピックの成功、戦乱紛争鎮静化への世界的情勢、独裁制・情報統制への民衆の嫌悪と抵抗、東西関係修復など情報重視による平和への強烈的な願望を見た年であった。この情報と平和への年を顧みながら便りをまとめる。

諸先生には貴重な玉稿を、また学生諸姉の協力をもえて、ここにたよりを持つことができました。心

から御礼を申し上げたい。

情報をユーザーに提供し、その人格形成への援助を任務としている図書館や大学の使命がますます重視されようとしている今日。しかも世界の若人を名あるこの地に迎えようとしている。新世紀の開幕をとまなうこの快挙をも成功させるよう一層の館利用を願いたい。

（清水）